

速報、さいたまゴールド・シアター本公演



ベテラン **岩松了** が新作を書き下ろす！
『夜明け、そしていくつかのモノローグ』(仮題)

第2回さいたまゴールド・シアター中間発表公演「Pro・cess2」『鴉よ、おれたちは弾丸をこめる』舞台写真より。©幸田 森


第2回中間発表公演『鴉よ、おれたちは弾丸をこめる』の興奮醒めやらぬ昨年末、さいたまゴールド・シアター本公演の方向性が決定し、団員たちの興奮はいや増すこととなった。というのも、なんとあの人気劇作家、岩松了氏が、この1年間余の集大成とも言えるさいたまゴールド・シアター本公演のために新作を書き下ろすことになったのだ。もともと岩松氏は第1回の中間発表公演『Pro・cess ～途上～』を観劇し、「感激」。団員ひとりひとりのパワーに圧倒され、自作の提供を申し入れたという経緯。さらに『鴉よ～』観劇後、団員のキャリアや志望動機をリサーチするなど、入念な準備を踏まえての新作書き下ろしとなった。内容はまだ明らかではないが、噂では船上が舞台で、どこかに向かう謎の集団が登場するとか。自ら九州行きのフェリーに乗り込み、体験取材も敢行した岩松了氏。その体当たりの作家魂から生み出される新作を、蛭川幸雄がどう演出し、さいたまゴールド・シアターの役者たちがどう応えるか。ますます期待は高まるばかりだ。

さいたまゴールド・シアター 本公演
『夜明け、そしていくつかのモノローグ(仮題)』 NEW

[日時] 6月下旬
[会場] 彩の国さいたま芸術劇場 小ホール
[作] 岩松了
[演出] 蛭川幸雄
[出演] さいたまゴールド・シアター
※詳細に関しては、別途お知らせ致します。

岩松了 (いわまつ りょう) PROFILE

昭和27年長崎県生まれの劇作家・演出家・俳優。劇作家として、'89年「蒲団と遺塵」で第33回岸田國士戯曲賞、'94年「こわれゆく男」、『鳩を飼う姉妹』で第28回紀伊國屋演劇賞個人賞、'98年「テレビデイズ」で第49回読売文学賞受賞など、受賞作多数。「シブヤから遠く離れて」は'04年に蛭川幸雄が演出した。俳優としても舞台「アジアの女」、TV「時効警察」「のためカンタービレ」など多方面で活躍中。



蛭川幸雄公開対談
NINAGAWA千の目 第8回 NEW
女優 **寺島しのぶ** × 演出家 **蛭川幸雄**

[日時] 4月8日(日) 13:00～(約1時間)
[会場] 彩の国さいたま芸術劇場 映像ホール

てらじましのぶ。1972年生まれ、京都府出身。父は尾上菊五郎、母は富司純子、弟は尾上菊之助という、演劇・俳優一家に生まれ、大学在学中より、テレビドラマ、舞台、映画などで活躍。演劇では、昨年「書く女」で第6回朝日舞台芸術賞【舞台芸術賞】、第14回読売演劇大賞【最優秀女優賞】(第11回に続き2回目)をダブル受賞した。また、映画では「赤目四十八瀧心中未遂」で2004年に第27回日本アカデミー賞【最優秀主演女優賞】、第46回ブルーリボン賞【主演女優賞】などの主要な映画賞を総なめにするなど、日本を代表する実力派女優。今年1月には主演映画「愛の流刑地」が公開され、大きな話題を呼んだ。彩の国シェイクスピア・シリーズでは第6弾「テンペスト」に出演。



<応募方法>
はがきに以下の事項を記入の上、締切日までにご投函ください。(応募多数の場合は抽選を行ないます。この場合、入場券の発送をもって抽選結果の発表にかえさせていただきます。)なお、メンバーズの方に対する優先枠を設けています。

- 記入事項
①郵便番号・住所 ②氏名 ③年齢 ④会員番号(メンバーズの方) ⑤希望人数(1枚のはがきで2名様まで)
- 応募締切
3月25日(日) 当日消印有効
- 応募先
〒338-8506 さいたま市中央区上峰3-15-1
(財)埼玉県芸術文化振興財団「千の目入場募集係」
- 問合せ先
財団メンバーズ事務局 tel.048-858-5507

「さいたまゴールド・シアター」『埼玉アーツシアター通信』では、
団員紹介 46名の団員すべてをご紹介しています。
役者を目指し、毎日、頑張っている団員にご注目。

団員のみなさんへの質問
.....
1.入団の動機 2.2回の発表公演の感想
3.「さいたまゴールド・シアター」の魅力とは?
4.演じたい役は?

中野富吉 (なかの とみよし)さん 76歳
技術系の本業を持つ一方で、長年、自立劇団で演劇活動をしてきた中野さんにとって、「さいたまゴールド・シアター」はその集大成の場だ。プロにするという主旨に賛同し、「ならばなってみせよう」と熱い思いを語る。あえて中間発表会にはかつての劇団仲間と呼ばず、今年6月の本公演ですべてをぶつけ、見てもうつもりだ。

- 1.残りの人生の可能性を信じて最後まで燃え立たせたい気持ちでいっぱい。それぞれの分野で経験を積んだ者が、演出家によって極致にまで変わろうとする姿を見極めたい。
- 2.お客さんを前にして手応えを感じた今、演ずることの喜びをさらに求めて土気も上がってきている。
- 3.蛭川さんの演出と、整った劇場設備とスタッフに支えられて、新発足した高齢化社会に将来を嘱望される、なお盛んな息の長い熟年パワーのパフォーマンスでしょうか。
- 4.どんな役にしても、しっかりとしたテーマに生きる人物を演じたい。

杜澤充英 (とざわ みちえい)さん 71歳
寺の住職を務める傍ら、高校教師として演劇部を指導してきた杜澤さん。第2回中間発表会ではノロウイルスに冒されながら出演。「比叡山での修行で鍛えた精神力に支えられました」。

- 1.70歳という節目を迎え、新たな意欲を燃やしてみたいと考えていた矢先、募集を知り、呼びかけの主旨に深い感銘を覚えた。演劇や映画における蛭川演出に魅せられていたので、直接それに触れ、自分を試してみたかった。
- 2.脚本に命を吹き込んで表現するその共同作業の素晴らしさ。小さな自分の殻がどんどん剥がれていくことの快感。蛭川さんの教育の仕方の独自性と人間性の豊かさ。精神的にも肉体的にも新しくしていく実感。
- 3.蛭川さんの演出家としての、人間としての魅力。私たち集団への関心の深さと励まし。芸術劇場の市民に対する誠実性への信頼感。
- 4.今までの人生から得た栄養を活かしながら、自分の力が試せる役ならどんな役でも意欲を燃やしたい。自分の中の新しい自分が発見できるような役。逆に言えばどんな役にもそうした姿勢で挑戦したい。

中島栄一 (なかしま えいいち)さん 76歳
芝居好きの父の影響で子供の頃からよく芝居を観ていたという中島さん。若き日の思いを胸に演劇に取り組んでいる。

- 1.募集に際し、蛭川さんは「その年齢を重ねた人々がその個人史をベースに、身体表現という方法によって新しい自分に出会うことは可能ではないか?」と書いた。この言葉に強い衝撃を受け、魅せられてしまった。
- 2.中学生の頃、ある演劇に出たが、それ以後、ずっと舞台に憧れていた。思いがけず、発表会に出られ、最高の気分であり、自分が天下を取った気持ちで実に楽しかった。演劇は一種の魔力がある。
- 3.既成劇団並びに役者に対して飽き足りないものがあるのではないだろうか? 「さいたまゴールド・シアター」といういふならば素人劇団に何かを求め、何かを期待し、新しい演劇の境地を切り拓いていくパイオニアのような気持ちで応援してくれているのかもしれない。
- 4.どんな役でもこなせる役者になりたい。高倉健のような役者を目指したい。「黙して語らず」。それだけで存在感のある役者にたまらない魅力を感じる。

西尾嘉十 (にしお かじゅう)さん 71歳
第1回中間発表会の初日は緊張したが、今は観客の前で演じることを楽しむ気持ちも。蛭川演出の舞台『ひばり』にも13名の仲間と出演。「プロの役者はやはり発声が違う!」

- 1.蛭川さんが指導されるからということですが、この年になって同志の仲間が出来、演劇が出来るといことは奇跡に近いありがたいこと。感謝の気持ちで一杯です。
- 2.「役者は観客の目で育つ」という言葉は正に至言でした。1回目と比べ、緊張感や台詞の覚え方、言い回しなど全く違うものになっていました。「とにかく観客の前で演ずる」ことがどんな俳優術の教科書よりも数倍優れたものだと感じました。
- 3.今までの人生を俳優として生きてこなかった私たちが、蛭川さんの演出でどれほどの舞台を創り出せるのかという関心。
- 4.俳優ですからどんな役でも全力でぶつかっていく強い意志を持ちたいと思います。昔から好きだったのは宇野重吉さんです。



©山下恒徳

林田恵子 (はやしだ けいこ)さん 57歳
編集者として文字の世界の中で自分を表現してきたが、介護などの大変な時期を経て、「文字だけではなく体を使って表現したい!」思い、経験のなかった演劇の世界に足を踏み入れた。「もっと人生経験のある団員の方に比べれば私はまだまだで、そう思える場所にいること自体が幸せだと思います」

- 1.蛭川さんの書かれた募集の際の文章を読み、「これだ!」と思ったので。自分を縛るものから解放されたいという思いが、マグマのように溜まっていたのだと思います。
- 2.悩むことも多いのですが、演じることは本当に楽しい。舞台は、蛭川さん始めスタッフの方達や団員皆で作っていくのだとわかりました。今は勉強することが山のようにあると感じています。
- 3.観に来てくれた友人の多くは、それぞれの人生が舞台から感じられると言ってくれました。それがゴールド・シアターの魅力では?
- 4.これはあくまでも夢ですが、エウリピデスのメディア。現実的には、「いや～な女」なんかを演じてみたいです。

中村絹江 (なかむら きぬえ)さん 56歳
団員の中で、最年少の中村さん。60歳くらいまでなら出来るかもと挑戦したが、自分よりずっと年上の団員が頑張っているのを見て、「とんでもない。私なんかまだまだひよっこ」と痛感した。ちゃんとした声を作ることが今の課題。「まず声が出ないと、何も伝えられせんから」

- 1.長年自営業の仕事に追われ、月日が流れ、息子たちもそれぞれ自分の道を歩き始めるのを見守り、私も自分としての自己表現できるものを作りたいという強い欲求にかられました。何かを探している、そんな時に募集の記事を見ました。
- 2.人前で声を出すことの難しさや、何にも出来ない情けない自分を見てしまったり……。でも皆で演じることがとても楽しかったです。そして日々本番に向けて創り上げられていくプロセスがエキサイティングで、はまってしまいました。
- 3.何でしょうね???
- 4.何でも演ってみたい。いろんなものに挑戦したいです。

百元夏繪 (ひやくも とまつえ)さん 64歳
小さい頃から習っていた日本舞踊で舞台に立つ心地よさと観客との一体感を知っていた百元さんは、夫の後押しで演劇に再挑戦。

- 1.1,000人の中から私の可能性を見つけて下さった蛭川さんの目を信じて、ひたすら蛭川さんについていこうと思いました。新しい「時」を重ねて、今までにない自分を発見したいと思っています。
- 2.「プロセス～途上～」で蛭川さんに「楽をするな!」と指摘されたのですが、私は(ダンスの講師の)広崎うらんさんから教わるダンスも目舞になってしまいます。「プロセス2」では下衆な婆にしたかったのですが演じ切れず、私の最大の課題である自己改造はまだまだ続きます。でもこんなに楽しくてよいのかしらと思っています。
- 3.蛭川さんの演出の魅力はもちろんですが、私たちの年齢で新しいことに挑戦し変わろうとしている一人一人のエネルギーが舞台上で一つになって観客席まで届いていることだと思います。
- 4.どんな役でもその芝居が成立するためには必要なので、どんな役でも大切に愛したいと思います。

美坂公子 (みさか きみこ)さん 61歳
亡き夫と劇団を主宰していた美坂さんにとって、夫の死後、久しく遠ざかっていた舞台に立てた中間発表会は、「夫へのオマージュだった」と言う。昨年5月から再び演劇に向き合ってきた10ヶ月。「上演された清水邦夫の2本の作品は、今の自分自身と自分であった三十数年を問い続けるものでした。そして、それは強い美意識と鋭い感性の蛭川さんという存在があっという間に初め成り立つ時間でした」

- 1.60歳を機に新しい環境の中で自分を見つめ直すことが出来たらと入団しました。
- 2.毎日の訓練と講師の先生方からの的確なアドバイスと蛭川さんの厳しい指導で、少し自分の体や声が変わってきたのかなと思います。
- 3.新しいものに挑戦していくエネルギーが満ちていることだと思います。
- 4.まだよく自分のことがわからないので、イメージ出来ません。